

地理総合や地理探究の授業で活用したい地元の地理書 —千葉県を例として—

千葉県立成田国際高等学校教諭

石毛 一郎

1 はじめに

高校で学ぶ地理は海外の事例が中心である。日本国内特に「地元」の地理を学ぶ機会は限られている。地理学は系統地理学と地誌学とから構成されており、地理総合の教科書も地理探究の教科書も、地理研究者たちが執筆している。系統地理的な学びに際しては、海外の事例にあわせて、国内や地元の事例も提示することで地理学的な理解がより深まるであろう。地誌的な学びに際しては、国内や地元について静態地誌に加えて動態地誌的な視点からも学ぶことで地域の地理的特色がより明らかになるであろう。

本稿では、高校の地理学習において地元地域を学ぶための資料について、筆者が勤務する千葉県の事例を位置付けた。1つめは千葉県が編さんした千葉県史の地誌編を、2つめは千葉地理学会が取り組んだ新聞連載と単行本を取り上げる。3つめは四街道市が編さんした四街道市史の概説巻を、最後に千葉県が編さんする千葉県議会史などを紹介する。

2 千葉県を描いた地理書

(1) 千葉県史地誌編

近年で代表的なものは千葉県史である。1991～2008年に編さんされ、歴史系39巻と自然誌系12巻の計51巻から構成されている。地理に関しては、歴史系の別編として「地誌編」が3巻刊行された。¹⁾ 地誌1(総論)は1996年に刊行され、千葉県の系統地理を記述した。地理的性格・歴史的性格・自然環境・産業社会・人口都市・県民の生活行動の7章と、千葉県の地理を象徴する50点の大判写真が口絵として掲載されている。地誌2(地域誌)は1999年に刊行され、当時の全80市町村の地理的特色を記述した。県域を湾岸・東葛・下総利根・九十九里・南房総の5地域に分け

て、計1000ページにも及ぶ詳細な地誌をまとめている。地誌3(地図集)は2002年に刊行され、千葉県に関する地図を集めて掲載した。各種主題図を系統地理的にまとめた章と、新旧地形図を用いて地域の変容をまとめた章から構成される。巻末には千葉県が作成した行政資料としての地図を一覧としてまとめ、計490ページで構成している。なお、地誌1はモノクロ(口絵のみカラー)で、地誌2と地誌3はカラーで作成された。

地誌1は地理探究における系統地理学習で活用できる。²⁾ 前述したように、高校の地理学習、特に系統地理の授業では世界全体や大陸・国などの海外の事例を中心に学ぶ。そこで、千葉県内の事例も取り上げ、身近な地域の系統地理的特色もあわせて紹介する。例えば、気候の章なら、「世界の気候区分」や「日本の自然環境」を学びながら「千葉県の気候区分」も提示する。大きくは温暖湿潤気候(Cfa)に属する千葉県であるが、より詳しく分類すれば、太平洋に面した地域や内陸の地域との違いや、岬の気候と湾の気候の違いなど、10もの類型に分類することができる。国際科もあり通学圏が広い本校では「自宅と学校の気候の違いは?」「冬の朝の気温差は?」などの生活実感を紹介しあいながら理解を深めている。

地誌2は地理総合や地理探究の地域調査で活用できる。³⁾ 地域調査の授業が多くの学校で割愛されている理由の1つが教材不足である。地域の特色、特に市町村の地理的特色とは何を示すのか? そもそも地理的特色とは何のことか? それらの疑問や悩みにこたえることのできる既存の史資料が見つからない、また見当たらないことも、この単元が避けられている理由の1つであろう。そこで県内全市町村(平成の合併前の80市町村)を紹介した本書を活用する。例えば干潟町(現旭市)は、専業農家率も高く大規模で効率的な農業が営

まれる稲作地帯であるが、減反を機に水田から野菜への転作も拡大した。シュンギクの生産が広まり、今では全国でも有数の産地として知られるようになった。このように市町村の特色が動態地理的に描かれた詳細で膨大な地理書は、地域調査を学ぶ上で大きな味方となる。本書は県内の中高校に配布されたほか、現在は希望する学校に蔵書の残部が無償配布されており、本校でも25冊を譲り受けて地域調査の授業で活用している。



千葉県史 地誌編

(2) おもしろ半島ちば

千葉地理学会が地元県紙の千葉日報紙上で連載した地理コーナーである。2013年より毎週水曜日の地方面に掲載され、10年間にわたり計404回の連載が続いた。それらは単行本化され、それぞれに120～150話を収録した『地理から学ぼうちばの魅力 おもしろ半島ちば』として、計3巻が刊行された。⁴⁾ 各巻ともに県内各地域を単位として章立てされており、例えば第3巻は「千葉県全体」と「千葉市」「葛南東葛」「北総」「東上総」「南房総内房」の計6章で構成されている。「中学生が無理なく読めるように」との編集方針の下で平易な内容や表現がなされている。新聞連載時は800～1000字の本文と写真・図表を1点の組み合わせで執筆されており、書籍資料としても生徒たちには読みやすい分量である。前述の千葉県史に比べると、より身近な歴史や逸話などが紹介されたり、生活者目線での写真や資料も数多く掲載されたりして、親しみやすく学べる利点が多い資料と言える。

本書は、地理総合の地域調査で活用することが

できる。各教科書では、まず「テーマを決めよう」「問いを設定しよう」とあるが、高校生にとってはこれが難しい。地理学（地誌学）では地域の特色を明らかにするために、系統地理の各分野の特徴をまとめながらその結果として、それぞれの地域の地理的特色を見いだしていく。限られた授業時間内（想定は4～5時間）で地域調査を行うならば、はじめに授業者から適切な選択肢を示す方が生徒も取り組みやすいと思われる。例えば、九十九里のほぼ中央に位置する山武（さんむ）市は、平成の合併で山武（さんぶ）町、松尾町、成東町、蓮沼村が合併して誕生した。「地場産業としての山武杉」「工業団地と成田空港」「イチゴ街道とネギ畑」「レクリエーション都市の誕生」などの地理的特色を備えている。

そこで本書を活用する。「山武杉の美林 - 再生へ各所で取り組み」（第3巻）では、吉野杉や木曽ヒノキなどと並ぶブランド木材としても知られる山武杉は、スギ花粉の飛散が少ないという優位性も活かしながら活路を見いだしていることが記載されている。「山武のストロベリーロード - いちご狩り園が30超」（第2巻）では、成東地区の国道沿いには県内で最も多くの観光イチゴ園が集中しており、イチゴ狩りのほかにも直売所の設置や宅配便による販売、雑誌やテレビでの広報や車イス等バリアフリーへの対応などの努力が実を結び、多くの賑わいを見せるようになったことが紹介されている。これらのように、地元地域の自然や産業の特色が描かれた地理書は、身近な地域の調査に取り組み際には、まず手に取って読んでみたくなる資料と言える。



おもしろ半島ちば

(3) 市町村史など

市町村単位の自治体史が刊行されている地域も少なくない。都道府県史に比べればその規模は小さくなり地理編が単独で設定されていない場合もあるが、それぞれの巻には地理的記述を見いだすこともできる。例えば、近現代史編や現代編などでは、各項目の終盤には現代や現在の特色が描かれている。地学や生物などの自然編や、民俗や生活などのページにおいても、現代の地理的特色が取り上げられている例も少なくない。周年記念誌のなかで現在の市町村域における地域的特色を集めている巻も見られ、それらが地理の研究者や教員によって執筆されることもある。

千葉県四街道市は市制30周年を記念して『四街道の歴史』を刊行した。⁵⁾ 4つの章と10の節で構成され、各時代の歴史専門家のほかに民俗や生物、地理からも2名が編さんに加わった。地理が担当したのは、まず「位置と自然」。地勢として地形・地質・地下水などを、気候として気温・風・降水量などを記述した。次に「市の発展」。土地利用・宅地化・農工業の変容・交通や商業の発達・姉妹都市などが記述された。戦後に急速な都市化が進んだ自治体として、近現代史と地誌に多くの分量を設定することにより、市域の変容が詳細に描き出されている。



四街道市史

市町村史をはじめとして、自治体は地元地域に関する膨大な資料を継続的に収集して公開もしてきた。市民向けに作成され配布されているパンフレットや冊子も多い。地域調査の授業ではぜひこれらも活用したい。各教科書では、Web資料の利用も促す一方で、公共図書館での閲覧や役所で

の入手も紹介している。現実の問題として、毎年多くの生徒が窓口を訪れたり資料を請求したりすることは先方にも迷惑が掛かってしまう。

そこで、授業者が代表して資料を入手して授業で活用するとよい。学校長名で資料の寄贈依頼文書を作成する。地域調査の授業で生徒が居住する自治体の地理的特色を調べるために、市勢要覧や統計資料、観光案内や産業紹介、民俗や自然、管内地図や自治体史関係などを可能な範囲で提供してほしい旨を明記する。宛は企画政策課などの組織全体を統括する部署ならば話が通りやすい。できれば郵送を希望するが、送料を負担したり受け取りに向いたりすることもある。これらの資料は市町村ごとに分類して、社会科教室や校内図書館などで開架すれば多くの生徒の目に留まり興味も引くことが期待できる。⁶⁾



印西市の資料

(4) 県議会史など

各都道府県においては、議会事務局や議会図書館などにより議会史の編さんが行われている。『千葉県議会史』は1995～2003年までを記録した第11巻までが刊行されている。⁷⁾ 内容は2部から構成される。1部では、政治や行政、産業や経済、社会や文化についての通史が記述されている。2部では、議会における質問や答弁を収録した議事概要が掲載される。これらは地理の授業でも大変役立つ。通史からは県内各地で進行した諸事象が詳細に記録されていることが分かり、議事概要からはそれらが企画されたことの影響や事業として形成されるまでの協働の詳細が綴られている。教科書と議会史はともに中立の立場から編さんされているが、後者は具体的な人名やより詳

細な地名・事象名が登場することにより、生徒にとってもより現実味を増す臨場感にあふれた記述内容だと言える。

都道府県によっては、議会史以外にも特定の部局などが事業の区切りや周年を記念した事業史を作っている。千葉県は東京湾岸の開発や空港などの巨大開発により戦後大きくその姿を変えてきた。その多くを担った千葉県企業庁が解散するにあたり『千葉県企業庁事業の軌跡』が刊行された。⁸⁾ 湾岸埋め立て事業やニュータウン開発、工業用水の確保や工業団地の整備、物流網の展開やレクリエーション都市の創出など、県内各地域の地理的特色に関わる事業の中心を支えてきた。特に別編では、それぞれの開発や地域の変容が大判の写真で紹介され、当時の動画も付属のDVDで提供されている。現在の千葉県を形成する代表的な事象が集成された貴重な資料と言えることができる。



千葉県企業庁史

3 おわりに

高校の地理学習における「地元」地域の事例にまつわる資料を紹介してきた。生徒たちは、教科書に記述される「遠く離れた場所の話」や「国や大陸など大きな規模のしくみ」などを頑張って理解しようと努力する。その際に「近くの身近な場所の様子」や「市町村くらいの大きさの特徴」に置き換えたり比較したりすることで、地理的特色の理解もさらに深まる。小学校や中学校の社会科の授業で学んだ内容も思い出しながら関連付けて理解することも期待できる。

生徒が高校で学ぶ地理を「自分事」としてとらえることができるように、地元の地理書を大いに活用したい。まずは大人たちがその存在をみなで確認しあうことから始めたい。そして、これまでに多くの県先輩たちが成果として残してくれたように、地理教員たちが協働することにより地元の地理書を形作れるとよいのではないだろうか。

参考文献

- 1) 財団法人千葉県史料研究財団編 (1996)『千葉県の歴史別編 地誌1 (総論)』千葉県
財団法人千葉県史料研究財団編 (1999)『千葉県の歴史別編 地誌2 (地域誌)』千葉県
財団法人千葉県史料研究財団編 (2002)『千葉県の歴史別編 地誌3 (地図集)』千葉県
- 2) 石毛一郎 (2023)「系統地理学習における『千葉県史』地誌編の活用」『千葉県の文書館 28』千葉県文書館
- 3) 石毛一郎 (2021)「授業で県史を使ってみよう」『房総地理 72』千葉県高等学校教育研究会地理部会
- 4) 千葉地理学会 (2017)『地理から学ぼうちばの魅力おもしろ半島ちば』千葉日報社
千葉地理学会 (2020)『地理から学ぼうちばの魅力おもしろ半島ちば2』千葉日報社
千葉地理学会 (2024)『地理から学ぼうちばの魅力おもしろ半島ちば3』千葉日報社
(第1巻と第2巻は完売。)
- 5) 四街道市史編さん委員会 (2012)『四街道の歴史』四街道市
- 6) 石毛一郎 (2013)「市町村資料の収集と活用」『房総地理 64』千葉県高等学校教育研究会地理部会
- 7) 千葉県議会史編さん委員会 (2023)『千葉県議会史 11』千葉県議会
- 8) 千葉県企業庁 (2017)『千葉県企業庁事業の軌跡』千葉県企業土地管理局



『おもしろ半島ちば3』は2024年5月1日発売。A5判カラー320ページで1650円(税込)です。一般書店では扱っていないため、購入・問合せは専用アドレス (omoshirochiba3@gmail.com) まで。